

**和泉市若年世代定住条件等に関する
意識調査・分析および提言**

報告書

平成 27(2015)年 4 月

和泉市

<目次>

第1章	基礎データの収集・分析	
1.	民間都市ランキング等の分析	1
(1)	調査の目的	1
(2)	和泉市の将来人口の予測	1
(3)	人気がある街の要件	3
(4)	大阪33市のデータからみる和泉市の特徴	5
2.	「まち」比較アンケートの分析	9
(1)	調査目的と調査概要	9
(2)	和泉市と地元の項目別評価	10
(3)	和泉市が主催するイベントの認知度・参加意欲	13
(4)	将来の居留意志	14
(5)	結果のまとめと提案	17
第2章	「都市」イメージ像の提案	
1.	「理想都市像」の提案	18
(1)	目的と調査方法	18
(2)	聞き取り調査が示す地域の課題と可能性	18
(3)	「理想都市」づくりに向けた提案	22
2.	「観光未来像」の提案	26
3.	「郷土愛醸成」に向けた提案	28
資料編		32

(執筆一覧)

第1章 基礎データの収集・分析

1. 民間都市ランキングの分析

(1) 調査の目的

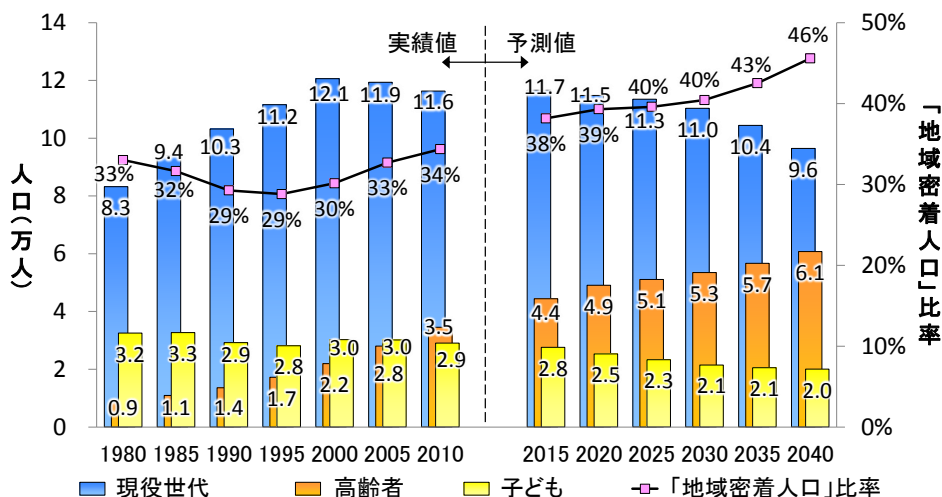
本節では、3種類のデータの分析により和泉市の特徴と課題を明らかにする。①過去30年間の人口推移と今後30年間の将来人口の予測をもとに、和泉市の人口構成の変化とそこから読み取れる課題を検討する。②民間不動産企業による「住みたい街ランキング」をもとに、人気がある街の要件を導き出す。③東洋経済新報社の『都市データパック』を用いて、大阪33市のデータからみる和泉市の特徴と課題を明らかにする。

(2) 和泉市の将来人口の予測

まず、和泉市の今後の課題をとらえるために、年齢別に3区分（子ども／現役世代／高齢者）した人口の推移を検討する。分析するデータは2種類あり、1980年から2010年の実績値については国勢調査人口、2015年から2040年の予測値については国立社会保障・人口問題研究所による『日本の地域別将来推計人口』（平成25年3月推計）を用いる。

和泉市における1980年～2040年の人口推移は、3つの傾向を示している（図1）。第1に、子ども（15歳未満）と現役世代（15～64歳）が2005年から既に減少し始めている。第2に、高齢者（65歳以上）はこの間一貫して伸びている。第3に、2000年以降における「地域密着人口」比率（子どもと高齢者の合計が総人口に占める割合）の増加である。広井良典（2013）は、現役世代にくらべて地域で過ごす時間が長い高齢者と子どもをあわせて「地域密着人口」と呼んでいる。和泉市において子どもの数は近年減少しているが、それを上回る勢いで高齢者が増えているため、結果として「地域密着人口」比率は2000年以降上昇している。国立社会保障・人口問題研究所によれば、和泉市では今後「地域密着人口」比率がますます増えていくことが予測される。

図1 年齢3区分別の人口推移（1980～2040年）



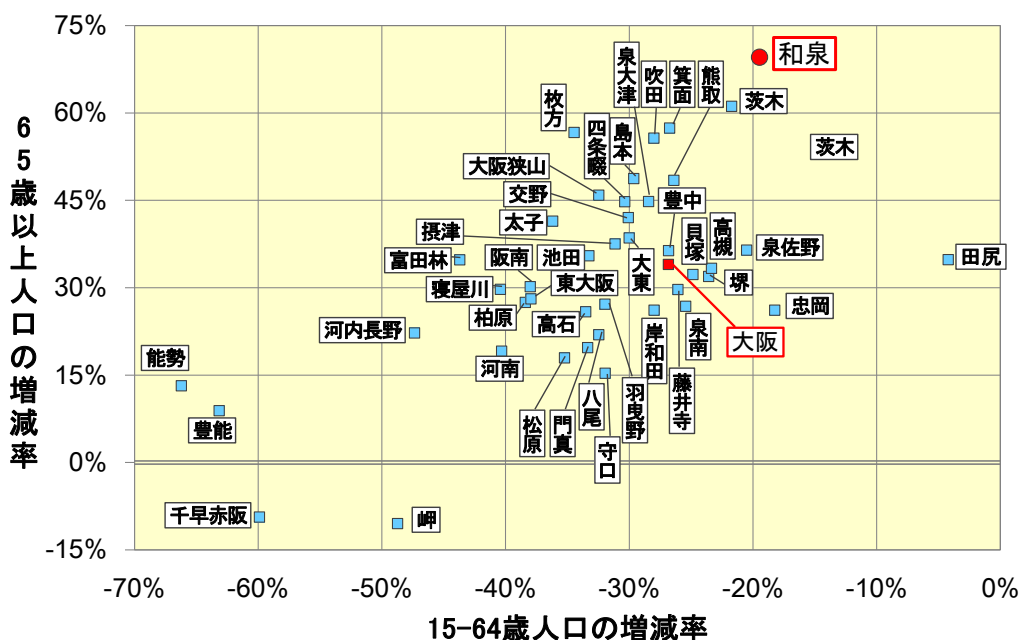
注：「現役世代」は15～64歳、「高齢者」は65歳以上、「子ども」は15歳未満を指す。

「地域密着人口」比率 = (年少人口 + 老年人口) / 総数 × 100

出所：藻谷（2014）をもとに大幅に修正。もとの数値は本文を参照。

図2は、大阪府内の市町村で、今後30年間に高齢者と現役世代がどのくらい増えるかを表したものである。高齢者（65歳以上）の増減率をみると、ほとんどの自治体で増加していることが分かる。また、現役世代（15～64歳）はすべての自治体で減少すると予測されている。和泉市は、他自治体に比べて現役世代の減少は緩やかであるが、高齢者の増加率は大阪府内で最も高い69.6%であり、今後30年間で急激な高齢化を経験すると予測されている。

図2 現役世代および高齢者の増減率（2010～2040年）



出所：藻谷（2014）をもとに一部修正。もとの数値は1.1.2の本文第1段落を参照。

以上の分析から今後の和泉市の課題は、急激な高齢化と子どもの減少であると言える。今後30年間の将来人口予測によれば、和泉市の高齢化（予測）は大阪府内で最も高く、老年人口の急激な増加への対応が喫緊の課題である。また、子どもの減少は既に始まっており、子どもが欲しい人たちが子どもを持てるような育児支援、すなわち希望する子どもの数と現実の子ども数が一致するような支援が、急激な高齢化抑制の鍵となる。広井（2013）が指摘するように、子どもと高齢者はどちらも地域で過ごす時間が長い。両者を区別せず「地域密着人口」として一体的に捉え、地域で過ごしやすくする工夫や配慮をなすことが、結果として子どもと子育て世帯、高齢者に安心をもたらし、かつ効率的な支援につながるだろう。

(3) 人気がある街の要件

次に、人気がある街がどのような特徴を備えているかを分析する。株式会社リクルート住まいカンパニーの「2014年版 みんなが選んだ住みたい街ランキング 関西版—20代～40代編一」を参照し、ランキング上位の街について、そこに住みたい理由の自由記述を分類し、多くの人々が住みたい街を選ぶ際に重視する項目を探る。類似のランキングは民間不動産企業や雑誌社が頻繁に実施しており、関西圏のランキングでは常に、梅田、なんば、三宮等のターミナル駅や千里中央、御影等の有名な郊外住宅地が上位に入る。以下の分析において住みたい街そのものではなく、住みたい理由を分析対象とするのは、回答者が選んだ街の実態を知っているとは限らないためである。以下では、「住みたい理由」の内容や回答者の性別・世帯構成（シングル／DINKS／ファミリー）との関連を検討し、人々が居住地に望む条件を把握する。「住みたい理由」の自由記述が示されているのは53人分であり、内容は大きく5つに分類される。自由記述で多くあがった順に、①交通利便性（23件）、②商業機能（22件）、③街のイメージ（14件）、④街並み（10件）、⑤教育、医療、役所へのアクセス（4件）であった（回答者が複数の項目をあげている場合があり、各項目の合計と回答者数は一致しない）。

① 交通利便性

表1 交通利便性を理由にあげた回答者の属性

	世帯構成			計
	シングル	DINKS	ファミリー	
男性	3	4	1	8
女性	10	3	2	15
計	13	7	3	23

交通利便性（交通・アクセス）に関しては、男性より女性のほうが理由にあげる傾向がみられ、また、世帯構成ではシングルが圧倒的に多かった。「通勤通学に便利」という理由は、20代と40代の女性、計4人があげ、いずれもシングルであり、シングル女性は都心を好む傾向があると考えられる。シングル女性が利便性を重視し職住近接の傾向があることは若林ほか（2002）でも指摘されている。

また、アクセスの良さに関連して、自由記述では「梅田に近い」「都心に近い」等の立地に関する理由、また、「特急が停車する」ことや「電車に乗れる」という理由もあげられていた。これらは、通勤通学の利便性とは分けて書かれており、ショッピング等のためにアクセスの良さを求めていると推測されている。

② 商業機能

表2 商業機能を理由にあげた回答者の属性

	世帯構成			計
	シングル	DINKS	ファミリー	
男性	5	3	2	10
女性	6	4	1	11
計	11	7	3	21

商業機能に関連する記述では、「商業施設の充実」や「ターミナル駅内の充実」、「大型モールがある」こと等、買い物の利便性を住みたい理由にあげる人が多く、はシングルの回答者が多かった。男女比に偏りはない。ただし、商業機能の具体的な中身を書いている人にしぼると、「繁華街やモールがある」ことを理由にあげるのは男性が多く、女性は「おしゃれな飲食店や雑貨店」、「話題のスポット」があることを理由にあげる人が多かった。男女で異なる商業機能を求めていることがわかる。

また、繁華街や大型モール、おしゃれな飲食店、雑貨店があることを住みたい理由にあげている人は、同時に音楽ホール等の文化芸術施設の充実をあげる傾向があり、商業機能の充実と各種文化施設の充実が関連付けて考えられている。

③街のイメージ

表3 街のイメージを理由にあげた回答者の属性

	世帯構成			計
	シングル	DINKS	ファミリー	
男性	1	5	4	10
女性	2	0	2	4
計	3	5	6	14

街のイメージに関する記述では、「おしゃれな街」というイメージがほとんどを占めている。その他に、「歴史がある」「文化的イメージ」「戦前モダニズム」という記述もあった。全体的に男性のほうが女性より街のイメージを理由にあげる傾向があり、特に「ステータスの高さ」に関しては男性の回答のみであった。

街のイメージをあげる住みたい理由にあげる回答者は、②商業機能のうちの「文化芸術施設の充実」や④街並みを同時に指摘する傾向がみられ、単なるイメージではなく、イメージを支える具体的な物的基盤をともなっている街が選ばれていると言える。また、街の「ステータスの高さ」や「高級感」をあげる回答者のなかには「資産価値が下がらない」という理由をあげる者もいた。

④街並み

表4 街並みを理由にあげた回答者の属性

	世帯構成			計
	シングル	DINKS	ファミリー	
男性	3	0	0	3
女性	2	3	2	7
計	5	3	2	10

街並みに関しては他の項目に比べて、「街並みがきれい」「自然が豊か」「閑静な住宅街」と具体的な理由があげられており、全体的に女性の回答が多い。女性では世帯構成による偏りはほとんどないが、男性はシングルのみであった。こうした街並みが次の「街のイメージ」に関連付けられていると考えられる。③街並みと④街のイメージは相互に関連づけて記述されていた。

⑤教育・医療機関や役所等の公的機関へのアクセス

表 5 公的機関・医療機関を理由にあげた回答者の属性

	世帯構成			計
	シングル	DINKS	ファミリー	
男性	0	0	2	2
女性	0	0	2	2
計	0	0	4	4

学校や役所へのアクセス、医療等の充実を「住みたい理由」にあげた人は少ないが、回答者の男女比は同じで、世帯構成はファミリーのみであった。「子育て、教育環境が良い」ことも同時にあげられていた。教育・医療や役所といった項目は家族をもつ人が重視していると考えられる。

以上の分析から2点が指摘できる。第1に、「住みたい街」を選ぶときと実際に住む街を選ぶときとは基準が異なる。「住みたい街ランキング」における住みたい理由では、交通や買い物の利便性の次に、街のイメージをあげる者が多く、通常は考慮される教育・医療機関や役所等の公的機関をあげる者はごく僅かであった。第2に、交通や生活の利便性を求めるシングル層（特にシングル女性は都心重視）に比べて、相対的にファミリー層は教育・医療機関や公的機関の充実と街のイメージを重視する傾向にあった。和泉中部地域では和泉中央駅周辺やコストコ、ららぽーと等の「商業施設の充実」をファミリー層にアピールすることが十分に可能であろう。ただし、医療機関については救急医療体制に問題があり、対応が必要であろう。

(4) 大阪 33 市のデータからみる和泉市の特徴

最後に、大阪 33 市における和泉市の位置づけをみていく。東洋経済新報社『都市データパック 2014』の自治体データをもとに、人口の再生産、住宅、経済力、医療・福祉、安全の5項目、20変数について分析を行った（表6）。以下の分析では、和泉市の順位にあわせて、大阪 33 市の中央値と比較していく。平均値ではなく中央値（データを大きさの順に並べたときに真ん中に来る値。本データの場合、33 市中で 17 位となる市の値。）を用いる理由は、『都市データパック』の自治体データでは各市の比率のみが記載されている項目がほとんどであり、正確な平均値が計算できないためである。分析の結果、和泉市の特徴は①手ごろな住宅と若年夫婦の集住、②郊外のベッドタウン、③安全を支える仕組みの必要性、という3点にまとめられる。

表 6 大阪 33 市の比較に用いた変数

項目	変数
人口の再生産	①若年層有配偶率・男（25～39歳）
	②若年層有配偶率・女（25～39歳）
住宅	③住宅延べ床面積
	④住宅地地価
	⑤持家世帯比率

経済力	⑥昼夜間人口比率 ⑦自市内従業割合 ⑧納税者1人当たり所得 ⑨小売業年間販売額・人口1人当たり ⑩完全失業率 ⑪労働力率・30～40代女性
医療・福祉	⑫保育所整備率 ¹⁾ ⑬待機児童比率 ²⁾ ⑭介護老人施設定員数（65歳以上人口100人当たり） ³⁾ ⑮人口1万人当たり医師数 ⑯人口1万人当たり病院・診察所数
安全	⑰人口1万人当たり交通事故発生件数 ⑱世帯当たり乗用車保有台数 ⑲1万世帯当たり建物火災出火件数 ⑳人口1万人当たり刑法犯認知件数

注：東洋経済新報社『都市データパック 2014』の自治体データを使用。ただし、以下の3変数を除く。

- 1) 保育所整備率＝自治体データの「認可保育所の定員数」を0～5歳人口（平成22年国勢調査）で割った値。
- 2) 待機児童比率＝自治体データの「待機児童数」を「認可保育所の定員数」で割った値。
- 3) 介護老人施設定員数（65歳以上人口100人当たり）＝自治体データの「介護老人施設定員数」を65歳以上人口（平成22年国勢調査）で割った値。

①手ごろな住宅が促す若年夫婦の集住

和泉市の特徴のひとつは若年層（25～39歳）の有配偶率の高さにあり、男性53.9%（大阪33市の中央値48.8%）、女性61.0%（同55.9%）で、男女ともに大阪33市のなかで2位に位置する（詳細は《資料1》民間都市ランキングの分析（分析表）。以下同様）。

和泉市で若年層の有配偶率が高い要因は大きく2つ考えられる。第1に、手ごろな住宅の入手しやすさがあげられる。和泉市の住宅延べ床面積は92.2㎡（大阪33市の中央値82.6㎡）で33市中6位の広さである一方、住宅地地価は8.01万円と低い（中央値12.78万円）。これらが和泉市における高い持家世帯比率につながっている（和泉市70.6%、中央値64.1%）。一般に住宅所有層は賃貸層に比べて定住志向が高いため、持家世帯比率の高さは定着度の高さにつながると期待される。他の若年層有配偶率が高い貝塚市、泉大津市、高石市（《資料1》民間都市ランキングの分析（分析表）の表中の青い網掛け）と比べても和泉市における住宅、とりわけ持ち家の取得しやすさは際立っており、住宅購入を考える若年夫婦をひきつける大きな誘因となっている。

第2に、若年層の地元定着と結婚を促すような地元文化の存在が考えられる。若者を対象とした社会学の研究によれば、近年の若者たちのあいだで、友人同士のつながりを重視する「地元つながり文化」（新谷 2007）が存在すること、大都市でもなく田舎でもない「ほどほどに楽しい地方都市」（阿部 2013）が見直されていることが指摘されている。若年層有配偶率が高い市は泉州地域に位置し、だんじり祭等を通して強い結びつきをもつ地域が含まれている。地元の友人関係を大切にし、地域に強い愛着をもつ若者同士が結婚し、実家の近くで暮らしている可能性がある。

②郊外のベッドタウン：経済力は中程度、働きたい女性にとっては育児支援が不足

和泉市の昼夜間人口比率（85.8%、大阪 33 市中で 28 位）、自市内従業割合（36.4%、同 19 位）はいずれも大坂 33 市の中央値より低く、和泉市が郊外のベッドタウンとして機能していることを示している。高齢者が少なく生産年齢人口が比較的多いため、納税者 1 人当たり所得と 1 人当たり小売業年間販売額、完全失業率は大阪 33 市のなかで中間よりやや良い値となっている。

郊外のベッドタウンとしての和泉市をよく表しているのが 30～40 代女性の労働力率の低さ（60.4%、同 24 位）であり、裏返せば専業主婦の多さである。その背景として、就業場所の少なさや遠さ、育児支援の不足が考えられる。和泉市の保育所整備率（29.6%、同 22 位）、待機児童比率（1.5%）^{（注 1）}はいずれも大阪 33 市の中央値を下回る値となっており、保育所の整備をふくめ育児支援の充実が必要であろう。

③安全を支える仕組みの必要：病院の遍在、車社会、治安の問題

ここでは、医療・福祉サービスと安全に関わるデータを検討する。

まず医療・福祉サービスに関して、65 歳以上人口 100 人当たりの介護施設定員数は、和泉市の高齢者人口の少なさを反映してか、大阪 33 市のなかではやや高い値となっている（和泉市 2.43 人、大阪 33 市の中央値 2.28 人）。

人口 1 万人当たりの医師数は中央値の 19.5 人を大きく上回る 27.1 人で、大阪 33 市のなかで 6 位である。しかし医師数の多さにも関わらず、人口 1 万人当たり病院・診療所数は 6.9 か所と中央値の 8.3 か所を下回り、大阪 33 市のなかで 29 位である。これは和泉市立病院や咲花病院のような大きな総合病院が人口当たりの医師数を押し上げているためであり、大病院から離れた地域において医療サービスの不足が懸念される。

安全に関するデータとして、人口 1 万人当たりの交通事故発生件数をみると、中央値の 56.8 件より発生件数はやや少なく 52.3 件である。しかし、33 市中で 11 位という順位は決して誇れるものではなく、和泉市における世帯当たり乗用車保有台数の多さを考えると、事故が起きにくい車道・歩道の整備が求められる。1 万世帯当たり建物火災出火件数（5.2 件、大阪 33 市中で 24 位）、人口 1 万人当たり刑法犯認知件数（189.2 件、同 19 位）は中央値を下回っており、この数字だけから判断すると治安は良いとは言えない。

医療と治安の問題は子ども、高齢者どちらにとってもマイナス要因となるため、急速な高齢化に対応し若年夫婦や育児世代の流入・定着を促すうえで早めの改善が望まれる。

注 1 待機児童の定義は自治体ごとに異なるため、順位については検討しない。

参考文献

阿部真大、2013、『地方にこもる若者たち——都市と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新書。

新谷周平、2007、「ストリートダンスと地元つながり——若者はなぜストリートにいるのか」

本田由紀編『若者の労働と生活世界——彼らはどんな現実を生きているか』大月書店。

広井良典、2013、『人口減少社会という希望——コミュニティ経済の生成と地球倫理』朝日新聞出版。

藻谷浩介、2014、「これからの泉大津を創る新総合計画シンポジウム」基調講演（2014年10月26日）の配布資料

（<http://www.city.izumiotsu.lg.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/30/soukeisinpomotani.ppt>）。

若林芳樹・神谷浩夫・木下禮子・由井義通・矢野桂司編著、2002、『シングル女性の都市空間』大明堂。

2. 「まち」比較アンケートの分析

(1) 調査目的と調査概要

本節では「まち」比較アンケートの分析結果について示す。本調査は、本学（桃山学院大学）で一人暮らしをする学生を対象として、自分の地元と比較して、和泉市の長所や短所、将来の居留意志などについてたずねた。本学で一人暮らしをする学生のほとんどは、18歳という若い年齢ではじめて和泉市に住んだ経験を持つ。彼ら彼女らが和泉市についてどのような魅力を感じているのか、あるいは不満や要望があるのかをアンケート調査から実証的に把握することは、若者世代に魅力的なまちづくりのために有益な知見をもたらすと考えられる。

調査企画は次の通りである。はじめに本調査にかかわる学生8人が一人暮らし学生に対してインタビューを行い、地元や和泉市に対する評価（長所や短所など）について自由に回答してもらった。その自由回答をもとに、学生と教員で議論を行い、アンケート調査を作成した（調査票は節の最後に示す）。

調査方法と調査期間は下記の通りである。本調査に参加した学生メンバーおよび本学の「データ解析実習」の受講者に、知り合いで下宿している学生にインタビューをするように依頼した。2014年12月23日から2015年1月20日のあいだに合計72票が集まった。基礎的なデータの分布は下記の通りである。

性別：男性 43（59.7%）、女性 29（40.3%）

学年：1回生 23（31.9%）、2回生 33（45.8%）、3回生 12（16.7%）、4回生 4（5.6%）

学部：社会学部 28（38.9%）、国際教養学部 13（18.1%）、経済学部 13（18.1%）、経営学部 8（11.1%）、法学部 10（13.9%）

なお、次の図1は和泉市と地元のどちらが都会かをたずねたものである。図からわかるように、和泉市の方が都会が54%と最も多く、地元の方が都会は24%と4分の1である。ここから、今回調査対象となった一人暮らしの学生は、比較的田舎の地方から大阪に出てきたものが多いといえるだろう。

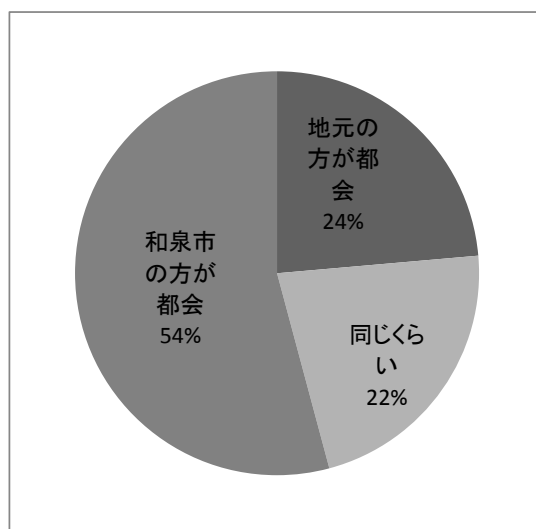
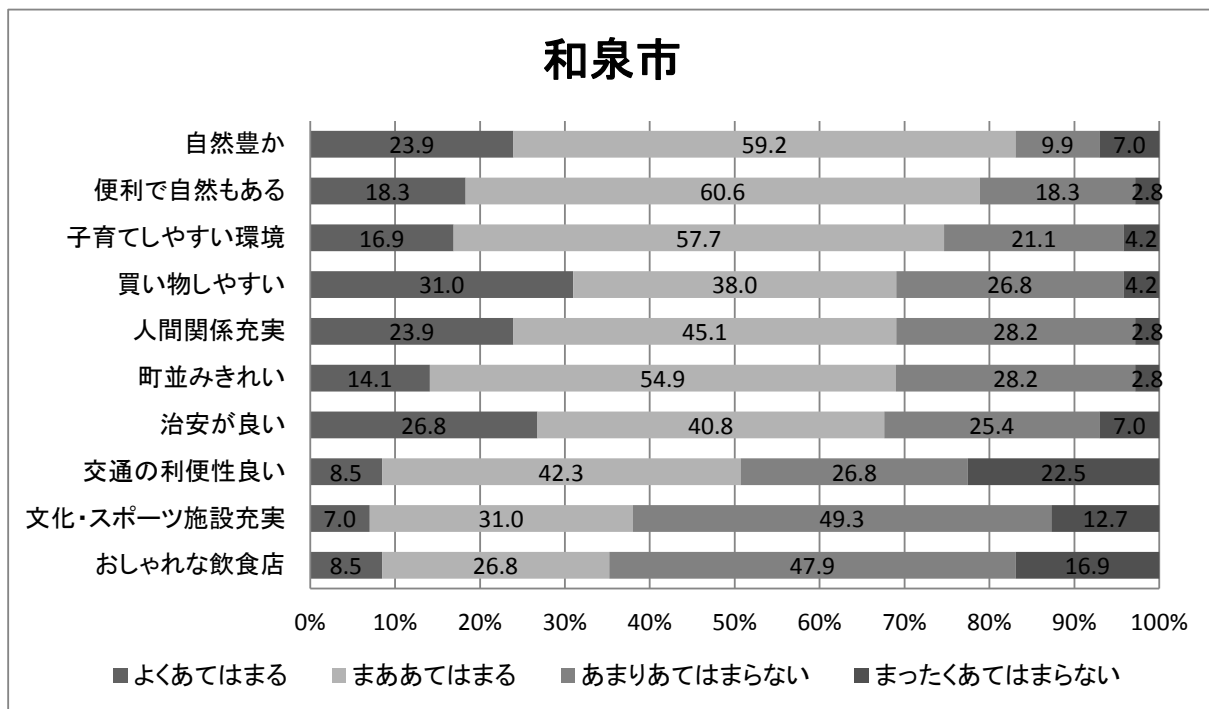


図1 和泉市と地元のどちらが都会か

(2) 和泉市と地元の項目別評価

はじめに和泉市と地元についての項目別評価の結果をみていこう。この質問では、和泉市と地元それぞれについて、「自然豊か」「治安が良い」「交通の利便性良い」など10項目について4段階で評価してもらっている。まず、図2の和泉市から見ると、「自然豊か」「便利で自然もある」「子育てしやすい環境」で肯定的な回答が多い。便利で自然もあるという回答の多さは、和泉市が「利便性」と「自然が豊かさ」を兼ね備えており、バランスが良い環境であることを示している。また、若者世代においても子育て環境の良さが高く評価されていることがわかる。一方、交通の利便性や文化・スポーツ施設充実、おしゃれな飲食店についてはやや評価が低かった。これは、なんばや天王寺といった都会に比べての評価であると考えられる。地元については、「人間関係充実」「自然豊か」「治安が良い」が高く評価されている。この結果は、先に見たように多くの学生が田舎から大阪にやってくるため、地元が田舎であることが関係しているといえるだろう。

図3は、レーダーチャートによって和泉市と地元の差をわかりやすく示したものである。それぞれの評価の平均点を項目別に示している（よくあてはまる4点、まああてはまる3点、あまりあてはまらない2点、まったくあてはまらない1点として各項目で表示）。図から、和泉市では、「買い物しやすい」「便利で自然もある」「おしゃれな飲食店」で地元よりも高い数値を示している。一方、「人間関係充実」「自然豊か」「治安が良い」については、地元の方が高い数値を示している。



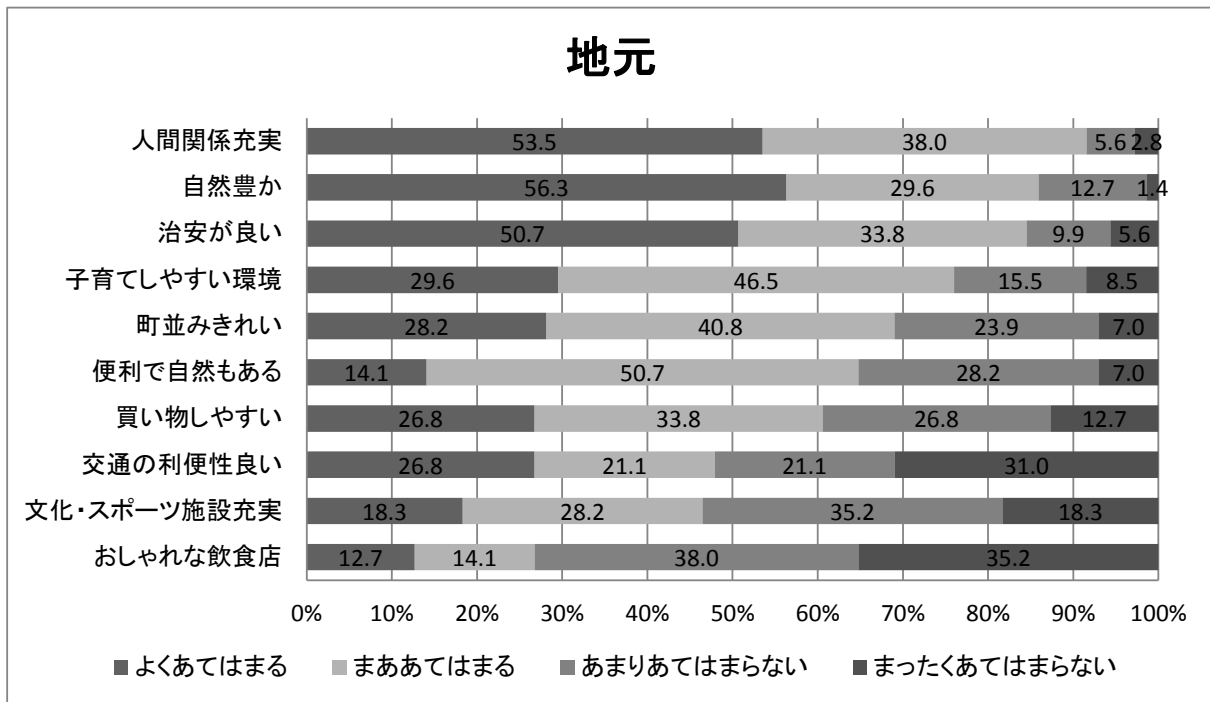


図 2 和泉市と地元の項目別評価

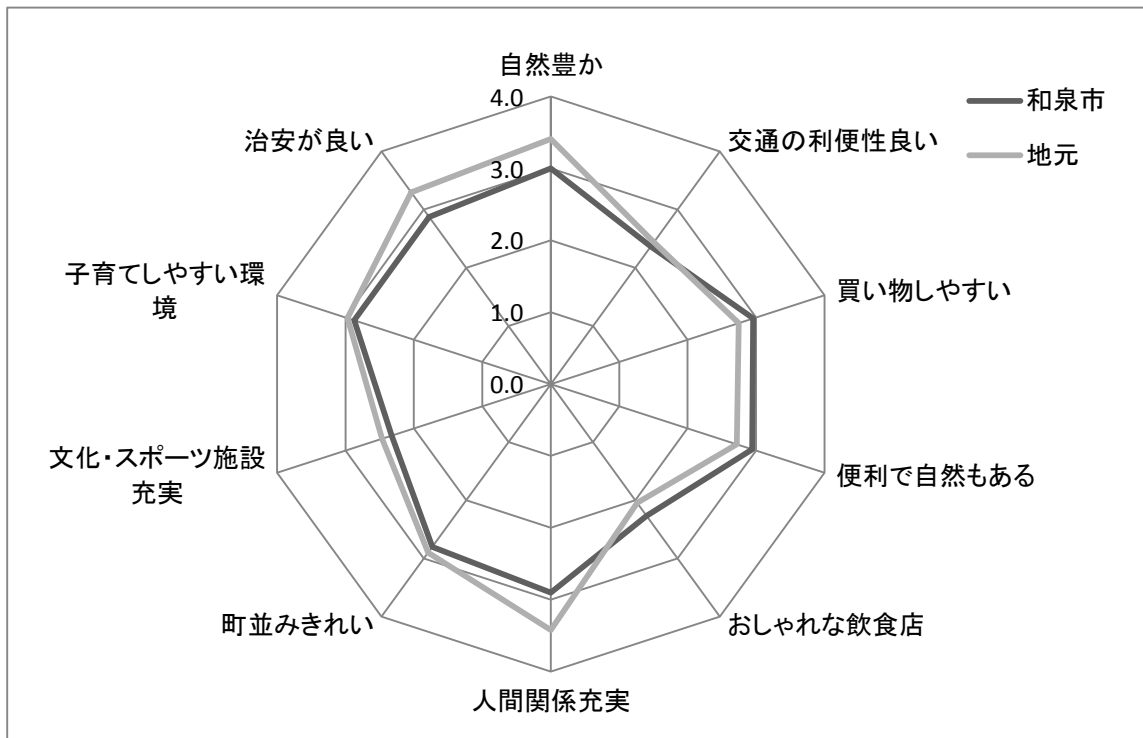


図 3 和泉市と地元の項目別評価（レーダーチャート）

和泉市にあつてよかったもの

次に「和泉市にあつてよかったもの」を自由回答についてたずねたところ、以下のような回答が得られた（代表的な回答のみ表示）。駅があることの利便性や、イズミヤやエコー和泉などの大型ショッピング施設などを評価する声があり、最近、たてられた「ららぽーと」に言及する回答も多かった。

- ・駅が終電のため、電車内で寝て過ごすことができる。和泉市中央公園は広く自然もあり、たまに利用させてもらっている
- ・駅の方に行ったらなんでも揃って買い物がしやすいし、最近はららぽーとができたので、すぐ遊びにいけるのが良いと思った。
- ・駅前のスーパー（イズミヤ）、泉北高速鉄道、ららぽーと、歯医者さん、100均、ニトリ、マクドナルド、ホームセンター
- ・エコー和泉や図書館、病院や電機やなどが駅の周りに集まっているのが便利でよい
- ・大型スーパー、駅から大学までの整備された道
- ・買い物に行くのが便利 電車一本で都会まで行けるのもよい
- ・地元では1時間に1本のバスのみ通ってるだけであとは自動車が交通手段だったから。
- ・和泉氏には駅があるところ。
- ・地元比べてイベントもたくさんあり、お店もとても多い。施設も整っていて街並みもきれいに感じた
- ・近くにスーパーやコンビニがありすごく便利です。ららぽーとができてより快適になりました。電車代が高いのがつらいです。
- ・ニュータウンだけあつて街並みも良く、駅前にショッピングモールがあるのが良い。公園も多い。

地元にあつてよかったもの

次に「地元にあつてよかったもの、和泉市にあつてほしいもの」をたずねたところ次のような回答になった。地元については、海や山、温泉など自然を評価する回答が多かった。また、映画館やカラオケなど都会にある施設を要望する声もあった。

- ・阿波踊りのような大きなお祭り。（屋台がたくさん出るような）
- ・いろいろな服などのショップ
- ・海、山、温泉
- ・海が遠いです。山は多くないと思います。欲しい施設は映画館です
- ・同じような雰囲気のところなので、特別な違いはないが、地元よりも車の量が多いように感じる。学生が食事しやすい飲食店がもう少しあればうれしい
- ・温泉
- ・カラオケ、飲食店（駅周り以外）
- ・交通機関が不便。駅が泉北しかないのが不便。もっと交通機関が便利になってほしい。
- ・地域の人たちのあたたかさ、誰とでもあいさつができていた
- ・もう少し自然がほしいと思いました。

- ・餅まき
- ・山、商店街の安売りするイベント
- ・有名な食べ物が和泉にはない
- ・私の地元は周りにたくさんの山があり、泳ぐことのできる川もあるのでそういったものがあればいいかなと思った。

次に「和泉市にあってほしいもの、充実させてほしいもの」について、上述のような自由回答ではなく、複数項目を選択肢として提示して回答してもらった。結果を示した図 4 から、多くの学生が映画館やカラオケといった娯楽施設を求めていることがわかる。

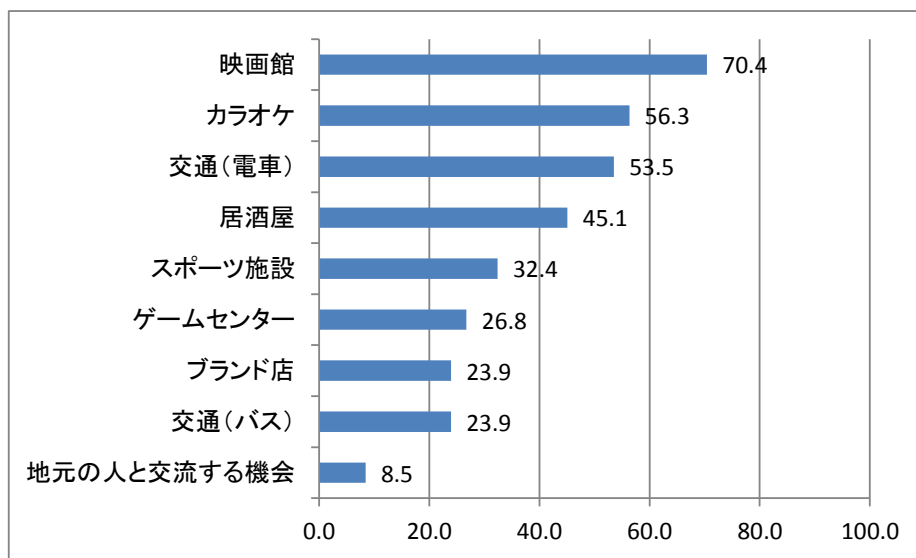


図 4 和泉市にあってほしいもの（複数回答）

(3) 和泉市が主催するイベントの認知度・参加意欲

次に和泉市が主催する 5 つのイベントについて、知っているか（認知度）と参加したいか（参加意欲）をたずねた。図 5 からわかるように、和泉の国グルメ、いずみ音楽祭、リアル宝探しについては、認知度に比べて参加意欲の方がかなり高い傾向にある。これらのイベントについては、学生を含めた若者への認知度を高めることで参加者は増加すると考えられる。歴史ウォークについては認知度・参加意欲とも低いですが、これは若者がその魅力に気づいていないということもあるだろう。こうしたイベントについては、その魅力に気づかせるような取り組みが必要だといえよう。

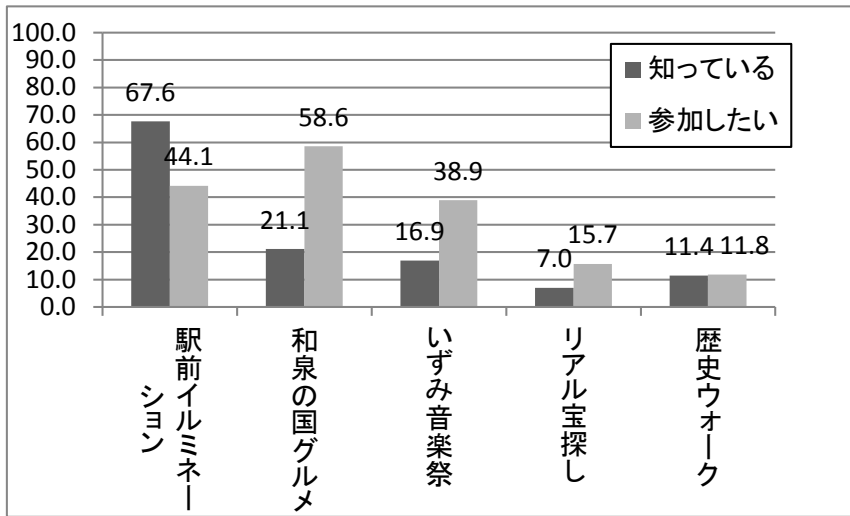


図 5 和泉市のイベントについての認知度と参加意欲

(4) 将来の居留意志

次に将来の和泉市への居留意志についてみていく。居留意志については「独身のとき」と「家族をもったとき」で異なると考えられるので、それぞれ別々で回答してもらっている。図からわかるように、「独身のとき」と「家族をもったとき」で居留意志が大きく異なる。「独身のとき」は住みたくない人が7割を占めるが、「家族をもったとき」では、住みたい人が半分以上である。これは、若い世代にとっても和泉市が家族を持った時に住みたい街と考えられていることを示している。一方、若い世代はカラオケや映画館、ファッション店の多く集まる場所に魅力を感じており、和泉市の居留意志が低いと考えられる。

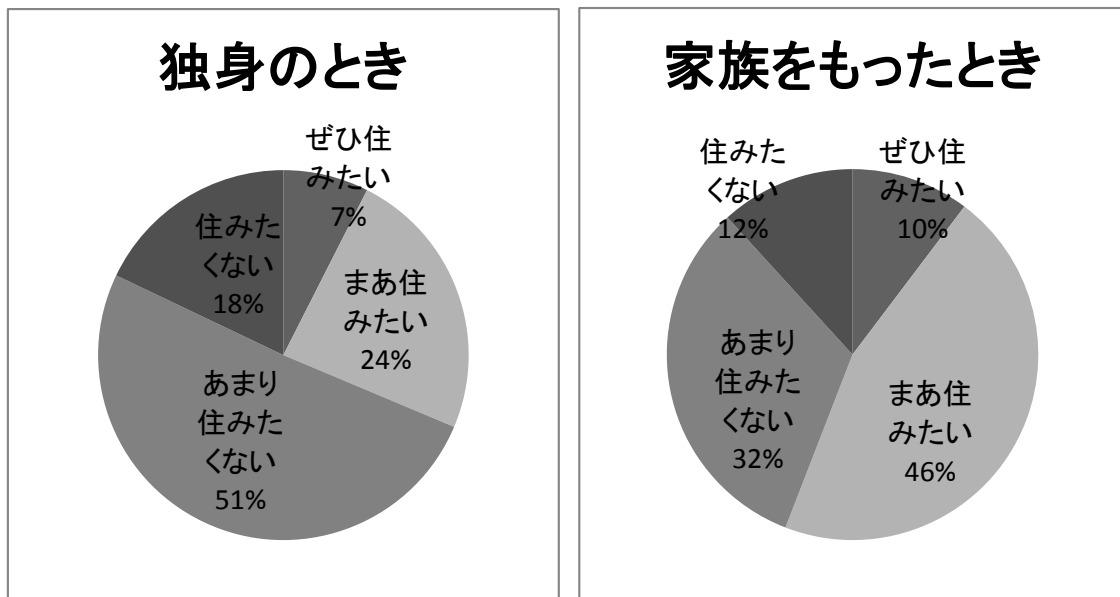


図 6 将来の和泉市への居留意志

居任意志については、それぞれ答えた理由を自由回答でたずねている。結果は以下の通りである。独身のときについて、住みたい理由は「静かで、のんびりしている、便利、街がきれい」といった回答が多い。一方、住みたくない理由は、「お店の少なさ、交通の不便さ、中心部からの遠さ、娯楽施設の少なさ」など、なんばや天王寺といった中心部に比べて都市度が低いことに関連する回答が多かった。家族をもったときについては、「静か、おちついている、子育てに良い、自然が多い」など、子育ての環境の良さを指摘する回答が多かった。

<住みたい理由（独身のとき）自由回答>

- ・ のどかで、のんびりできそうだから
- ・ 買い物ができる場所が多くあり便利だから
- ・ 治安が良く、生活用品を買える店があるから
- ・ 身の周りの者が揃えやすい、街がきれい
- ・ ちょっと行ったら何でもあるから
- ・ 駅が近くにあって便利。電車代が少し高いが、一人なのでいいと考える。
- ・ 静かだから
- ・ 静かで落ち着いているから、人口が少ないから
- ・ 自然もあって生活にも困らない環境だから

<住みたくない理由（独身のとき）>

- ・ 大阪だから都会だとイメージしていたけど実際めっちゃ田舎で泉北も高いから
- ・ 大阪の中心部に行くのに少し遠いから
- ・ お店がなく不便
- ・ 買い物がしにくいから。
- ・ 交通があまり良くない、特に電車
- ・ 交通が不便、何もない、道が暗い
- ・ 交通の便。遊ぶところがない
- ・ 娯楽施設が少ない、市内まで少し遠い、泉北高速鉄道の運賃が高い
- ・ 坂道が多いため
- ・ 実家の仕事を継ぎたいのと、やっぱり地元で育ったから地元で住みたい
- ・ 市内の方が便利
- ・ 泉北高速 高い。遊ぶところが少ない
- ・ 中心地から少し離れている
- ・ 中心部に遠い

<住みたい理由（家族をもったとき）>

- ・ 落ち着いている
- ・ 空気もまだきれいな方だし、家族と安心して生活できそう
- ・ 子育てしやすい環境だと思うから
- ・ 静かで住みやすいと思う

- ・自然が豊か
- ・自然もあるし、地価が安い
- ・住宅街なので子供とかの友達が増えそう
- ・治安が良くて、日常品をそろえるのに困らないし、のんびり暮らせそうだから
- ・都会で住むより安心だから。
- ・程よく都会で住みやすい。スーパーなども近くにある。

<住みたくない理由（家族をもったとき）自由回答>

- ・子供に自分が育った地域を見せてあげたいし、地元を大切にしたいから。
- ・坂道が多いため
- ・市内の方が便利
- ・中心地から少し離れている

最後に何があれば住みたいかについて自由回答でたずねた。やはり、独身のときについては、娯楽施設や交通料金についての回答が多かった。

<これがあったら住みたい（独身のとき）自由回答>

- ・あそぶところ、ラウン、スポッチャ、カラオケ
- ・遊ぶ所の充実、泉北線がもっと安くなれば良いと感じる。
- ・アミューズメントパーク
- ・今のままであってほしいと思う
- ・お店がいっぱいできたら。電車が安くなったら。
- ・公共交通機関の便利性向上と値下げ（バスを南河内方面も）
- ・交通の便をよくすればすみたくなるかも
- ・電車賃が下がった時。飲食店などが駅周辺に集中しているので大学近くにできてほしい
- ・電車賃が安くなったら
- ・電車賃を安くして、もう少し交通の便を増やしてほしい
- ・電車など、交通のインフラが不十分なので住みたいと思わない。車があれば別。
- ・電車の終電を遅くしてほしい
- ・服などのお店、おしゃれなお店
- ・もっと都会っぽく、お店やカフェがあったら。電車が安くなったら。

<これがあったら住みたい（家族をもったとき）自由回答>

- ・今の和泉市の状態でも住み続けられると思います
- ・映画館がないのであったほうが良いと思う
- ・街灯増加、サービス施設増加、ファミレス増加
- ・家族単位で参加できるイベントがあれば良いと思います。
- ・公園、保育園、保健所、病院
- ・公園や散歩できる場所がある
- ・子供と一緒に遊べる公園や施設

- ・もっと都会っぽく、お店やカフェがあつたら。電車が安くなつたら。
- ・やはり治安のことを考えると住みたくないです
- ・遊園地などができれば町も活性化するだろうし、家族も楽しんで暮らせる

(5) 結果のまとめと提案

これまでのアンケート調査の結果をまとめると次のような和泉市の魅力と不足点を指摘することができる。第一に、和泉の最も大きな強みは、都会の魅力（便利さ、街並み）と田舎の魅力（澄んだ空気、キレイな星空）を兼ね備えていることである。駅が近く徒歩圏内にあり、大型ショッピング施設が充実しているにもかかわらず、自然が豊かで静かという評価が非常に高かった。こうした「都会と自然のバランスの良さ」は和泉市の強みであり、広くアピールできると考えられる。また、若者や若い家族向けに「自然」をアピールした企画を実施することもいいかもしれない。たとえば、イチゴ狩りや星空ツアーの開催は若い世代にとっても魅力的なイベントだと考えられる。ただ、その際、車を持っていない傾向にある若い世代向けに、移動手段もパックにした企画の方が良いだろう（レンタルサイクル、現地までバスで送迎など）。

第二に、和泉市は、若いときよりも家族を持ったときにおいて魅力が非常に高かった。若い世代は居住地を決める際、カラオケや映画館などの娯楽施設、ファッション店など都会性を重視することが多く、このことが和泉市が魅力に欠ける理由であるだろう。若者の魅力を高める方策として、娯楽施設を増やすことや、若者に必要とされるスポーツ施設を充実させること、交通機関への不満（電車の本数・値段・バス）を解消することが考えられる。ただし、娯楽施設を増やすことは、和泉市の強みである「自然が豊かで、静かで、子育てしやすい環境」を犠牲にしてしまうことにもつながるので慎重に考えるべきであろう。交通期間への不満については、車を持たない学生にとってはバスが考えられるが、「バスは馴染みがない」、「時間が不確定」といった理由で使わない学生がほとんどだった。学生にバスの利用を促進するような企画を考えるのも良いかもしれない。

第三に、音楽祭やグルメイベントについては高い参加意欲にもかかわらず、認知度は低かった。これらのイベントについては認知度を高めることで、参加者は増加すると予想される。和泉市では Facebook など SNS を広報として使用しているが、現在、多くの若者がイベントを認知し、参加を決めるものが Twitter による口コミである。たとえば、本学の学生をイベント広報に参加させることで、学生の Twitter を通じて、イベント情報は広く伝わり認知度もあがると考えられる。

第2章「都市」イメージ像の提案

1. 「理想都市像」の提案

(1) 目的と調査方法

本節の目的は、民間都市ランキング等のデータ分析（第1章）をふまえ、和泉市内で活動する市民団体に聞き取り調査を実施し、若年世代の視点から「理想の都市」の条件を検討・提案することにある。分析および提案の対象は、和泉中央駅周辺や桃山学院大学、トリヴェール和泉を含む和泉市中部地域である。中部地域は、近年人口の伸びが著しく、駅周辺には市民活動の拠点となりうるシティプラザ等の施設が配置され、ららぽーとやコストコなど大型商業施設の開業が相次ぐ。他方で、地域の特色が感じられない画一的な施設と景観、住民の年齢層の偏り、住民同士の関係の欠如という新しく開発された郊外に共通する課題が残されている。すでに人口が減少している和泉市の北部地域（和泉府中駅周辺）や南部地域（山間部）に対して、人口増加に沸く中部地域であるが、現在の開発が終われば人口減少は避けられない。新奇性が失われた数年後に「どこにでもある（寂れた）郊外」とならないために、何が必要か、何ができるか。地域の魅力を向上させるような活動やネットワークに聞き取り調査し、若い世代にとってどのような地域が魅力をもち、そうした魅力を生み出すためにどのような活動が可能かを検討する。和泉市の潜在的な資源を発掘・活用することで、財政的に持続可能かつ和泉市の独自性を高めるような仕組みを提案したい。

「理想都市像」の提案を行うために和泉市内で活動する以下3つの団体・組織に聞き取り調査を実施した。

- ① 有限会社コミュニティ（2014年7月31日実施）
- ② 石尾山弘法寺（2014年12月1日実施）
- ③ 「いずみの国のいつしくみ市」実行委員会（2014年12月1日および12月12日実施）

これらの団体・組織は、組織形態（法人格の有無や種類、メンバー数等）や設立の経緯、活動内容は異なるが、いずれも地域社会に貢献するべく独自のアプローチを行っている。以下では、聞き取り調査の概要をまとめたうえで、1.1節の分析と聞き取り調査から明らかになった和泉市の強みと弱みを整理し、和泉市がこれから目指すべき方向を示す。

(2) 聞き取り調査が示す地域の課題と可能性

① 有限会社コミュニティ

有限会社コミュニティは泉北ニュータウン等を対象とした地域紙（ローカルペーパー）を発行・配布する企業である。同社は1971年に創業し、泉北ニュータウンとその周辺地域を対象とした『泉北こんにちは』を創刊した（1972年『泉北コミュニティ』に改称）。1978年には、金剛団地・狭山ニュータウン、金剛東ニュータウンを対象とした『泉北コミ

ユニティ金剛・狭山版』を創刊し（1984年『金剛さやまコミュニティ』に改称）、現在、『泉北コミュニティ』と『金剛さやまコミュニティ』の2紙を扱っている。紙面には、地域の開発計画や行政・議会の動向から、学校や市民団体の活動、新規出店やキャンペーンの情報、地域で活動するサークルのメンバー募集や読者同士の不用品交換（「譲ります」等）の情報まで、硬軟とりまぜた地元の情報が掲載されている（写真1）。

写真1 『泉北コミュニティ』2014年10月2日号（左）および2014年10月23日号（右）



出所：泉北コミュニティ「コミュニティバックナンバー」『コミュニティ 2525』（<http://www.community2525.com/backno/>、アクセス日 2015年2月1日）

有限会社コミュニティの特徴は、地域紙というメディアを生み出すことで、地域に密着した情報発信を行うと同時に、住民同士が交流する場の提供を目指している点にある。同社のユニークな姿勢は、行政のまちづくりに対する問題意識と創業当初のニュータウンの状況に由来している。近代の日本の開発政策は団地や公園、道路などのハード面の整備に偏り、ニュータウンのような場所でのコミュニティ形成に行政は全く無策であったが、まちづくりにはそこに住む人間の関係づくりが必要だと考えたそうである。しかし、地元のことを地域の人が知らなければ人間関係もうまくいかない。同社が創業したころの泉北ニュータウンは、まち開き（1967年）からまだ間もなく、大阪市内などの他地域から新規来住者が一気に押し寄せていた。新住民たちは買い物や病院など地域の情報を求めていたが、隣近所の住民も同時期に来住しているために誰からも地域情報が得られず、日常生活に支障・混乱をきたしていた。有限会社コミュニティの地域紙は情報を求める新住民のニーズに合致し、住民同士のコミュニケーションを仲介・促進する場として受け入れられていく。

有限会社コミュニティの聞き取り調査が示しているのは、新規に開発された地域や新住民にとってコミュニケーションと情報共有の場が不可欠であるという点である。コミュニケーションの場は、メディア空間でも現実の空間でも構わない。新住民の生活を支え定着を促すためには、まず地域（住民）の情報に触れられる場が必要であり、情報共有と相互の交流を通じて地元への関心が育まれていくと考えられる。

②石尾山弘法寺

石尾山弘法寺は、和泉中央駅から徒歩約10分にある高野山真言宗の寺であり、「石尾のお大師さん」と呼ばれ親しまれてきた。弘法寺では、「地域社会を豊かにするお寺活動」を目指し、「お寺」という空間を使って地域に開いた様々な活動を実施している。本堂を開放した「お寺かふえ」や「昼下がりにコンサート」「月の明かりコンサート」の実施、毎年9月に和泉中央駅周辺で実施される「和泉の国ジャズストリート」への会場提供、境内に提灯を灯した「お寺で浴衣で夏祭り」、地域の自然を見直し味わう「いずみの国のいつくしみ市」などによって、年齢性別を超えた多くの人々を惹きつけ、ふだん寺を訪れることがない人々が寺や地域の魅力を（再）発見する機会を設けてきた。

写真 2

「お寺で浴衣で夏祭り」ポスター



写真 3

「和泉の国ジャズストリート 2012」



出所：石尾山弘法寺『石尾山弘法寺ホームページ』（<http://www.kobozhi.com/>、アクセス日 2015年2月1日）より、写真2は「お寺で浴衣で夏祭り」、写真3は「ホーム」参照。

弘法寺が定例の宗教行事以外に独自の地域活動を行うようになったきっかけは、仏教講座等に来訪する年配の住民が同伴する孫たちを意識するようになったことであり、子どもたちが楽しめるお絵かき大会・花火大会を企画したのが始まりである。現在の副住職が寺を継ぐにあたり、地方寺院の役目として地域に貢献できないかと思ったそうである。そこで寺のもつ役割の一つとして「憩いの場」という機能に着目し、地域の人々や親子連れがのんびりとくつろげる場所にするため、様々なイベントを企画した。

地域に向けたイベントの開催にあたって留意している点は、不易流行および継続性の2点である。今あるものをどのように用いるか、その良さをいかにして“気付いてもらうか”をまず念頭に置き、新旧の価値の融合を図っている。自分の死後になって評価されるものを遺したいという想いがあり、活動を継続していくため、無理して1回限りの企画を立てない。こうした地域向けの活動を積み重ねるなかで、地域コミュニティの人々が生き生きとしてきたように感じられている。当初は、「〇〇を開催する？それなら仕方ないので、参加する」と受け身・後手の姿勢であった近隣の人々が、「今年も開催するなら、こんなことをしたらどうだろう？」と先を読んで提案し、積極的な姿勢に変わってきたそうである。

石尾山弘法寺の聞き取り調査からは、既存の資源の活用と長期的な視野が継続的な活動

を可能にしていることが分かる。「憩いの場」「交流の場」という寺社が歴史的に担ってきた役割に注目し、地域コミュニティの核として再発見・再評価する動きは他地域でも起きている（中尾・広井 2005；広井 2006）。弘法寺の活動はこうした動きに連なるものとして理解することができる。また、活動に際しては檀家のネットワークや地域で活動するNPO等とのつながりを活かして知恵やスキル、活動物資を調達し、無理のない範囲で企画することがイベントの成功と継続につながっている。こうした活動は、一過性の盛り上がりを目指すのではなく、自分の後の世代に大事なものを遺したいという長期的な視野に支えられている。

③ 「いずみの国のいつくしみ市」実行委員会

「いずみの国のいつくしみ市」（以下、「いつくしみ市」）は、「いのちをいつくしみ、かけがえのない豊かな自然を未来の子供たちに」というテーマのもとに石尾山弘法寺で開催され、2013年12月の第1回に引き続き、2014年11月で2回目の開催となる。地元の有機野菜やオーガニックフード、ナチュラルなお菓子、手作り雑貨が並ぶ「ナチュラルマーケット」と自然との共生を考える企画が実施され、当日は子連れの若い母親たちが多く来場した（写真4）。

写真4 第1回「いつくしみ市」



出所：石尾山弘法寺、2014、「明日は「いずみの国のいつくしみ市」『石尾山弘法寺ホームページ』（<http://www.kobozhi.com/>、アクセス日 2015年2月1日）。

「いつくしみ市」開催のきっかけは谷山池の保全活動と東日本大震災である。谷山池（和泉中央丘陵の南にある灌漑池）の保全を求める活動は、水利権をもつ12水利組合が売却を決定したことに始まる。売却に反対する市民が2012年8月に「谷山池の保存を求める会」を結成、2013年5月には1万筆を超える署名を集めて議会に保全を求めて請願書を提出したが、否決された。自然を守ることに利益を優先する社会の風潮が和泉市にもあると考え、「売却反対、自然を守ろう！」とだけ叫ぶのではなく、「楽しみながら、大事な自然、大事な命を考える」場をつくって、谷山池の状況をより多くの市民に知ってもらおうと「いつくしみ市」を企画した。また、「いつくしみ市」実行委員会の中心メンバーにとって3.11（地震、津波、福島第一原発の事故）のショックは大きく、主婦・大人として何ができるかを模索していたことも「いつくしみ市」の活動につながっている。「いつくしみ市」実行委員会は7名で構成され、主婦3名を主軸として、年齢は30代から60代まで多様である。

活動の課題は2点である。第1に、食や有機農業に関する意識の格差拡大であり、関心層と無関心層の二極化が進んでいると考えている。「いつくしみ市」は無関心層に意識してもらえるように、「すごくオシャレ」「すごく楽しい」といった無関心層が入りやすい様々な入り口を用意しようと試みているが、「いつくしみ市」はまだ2回目ということもあり楽しむだけの参加者がほとんどである。第2に、和泉市の恵まれている点に市民が気づいていない。都心に1時間足らずでアクセスでき、商業施設が充実している一方で、絶滅危惧種が多く観察されるほど貴重な自然が残されている。和泉市外の人が豊かな自然を評価していることに市民は気づいておらず、「和泉市は田舎」と否定的である。自然が豊かな和泉市は子どもたちにもっと自然と触れ合ってもらうには最高の場所である。現在、谷山池に親しみ、その美しさに触れる機会を増やすため、「谷山池ガルテン」(市民農園)をつくる計画が進行中である(図1)。自然を楽しむことを通して“生きること”を考えてもらい、そこに集まった人たちがさらにつながっていく、そのための拠点をつくりたいと考えている。

図1 「谷山池ガルテン」のチラシ



(3) 「理想都市」づくりに向けた提案

① 和泉市の強みと弱み

表1は、以上の聞き取り調査および第1章における民間都市ランキング等のデータ分析をもとに、和泉市の強みと弱みについて特徴的な項目3点を整理したものである。第1に、家族形成という点からは、若年層(25~39歳)の有配偶率の高さが強みとしてあげられる。和泉市における若年層の有配偶率は、男性53.9%(大阪33市の中央値48.4%)、女性61.0%

(同 55.9%) と、男女ともに大阪市 33 中で 2 位の高さである。この若い夫婦たちが市内に定着し子どもを生み育てていけば、和泉市の人口減少や急速な高齢化の抑止が期待できる。しかし、問題は 30 代の転出が多いことであり、その要因の一端として和泉市における育児支援の不足があげられる。和泉市の保育所整備率(0～5歳人口に占める認可保育所の定員数の比率)は 29.6% (同 30.6%)、大阪市 33 市中で 22 位の低さである。和泉市の待機児童比率(認可保育所の定員数に対する待機児童の比率)は 1.5% (同 0.8%) であり、保育所に対するニーズが満たされていないことが分かる^(註 1)。保育所を含めた育児支援の不備は、子どもをもちたい若い夫婦の転出につながりかねない。

第 2 に、地域に高い関心をもって積極的に活動する住民の存在は和泉市の強みと言える。ただし、活発な層は住民の一部であり、地域や環境に対する関心層と無関心層の二極化が指摘されている。また、今後 30 年間の将来人口予測において、和泉市は大阪府内で最も高い高齢化率を経験すると予測されており、増加する高齢者への対応が課題である。体力の低下にともなって引きこもりがちな高齢者を孤立させないために、高齢者が地域で過ごしやすい工夫や地域のネットワークのなかに組み込む仕掛けが必要であろう。しかし、住民同士の関係づくり等のソフトな支援は不足している。

第 3 に、郊外に位置する和泉市の強みは、ニュータウンと自然の共存にある。通勤・通学のアクセスや商業施設の充実といった都市的な利便性と豊かな自然の両方を享受できる。また、地価が安く広い住宅を比較的手ごろな価格で入手可能であることは、持ち家購入を検討する人々にとって和泉市に転入する大きな誘因となるであろう。他方で、自然が残っていることや娯楽施設の不足に対して、“未開発である” “田舎っぽい” といった否定的なイメージをもつ人々もいる。

表 1 和泉市の強みと弱み

	強み	弱み
① 家族の形成	・ 若年層の有配偶率の高さ (1.1.3)	・ 保育所整備率の低さ (1.1.3) → 子どもが欲しい若年夫婦の流出?
② 交流、地域活動	・ 地域に対して積極的な姿勢をもつ住民の存在 (2.1.2)	・ (地域や環境に対する) 関心層と無関心層との二極化 (2.1.2) ・ 急速な高齢化への懸念 (1.1.2) → 高齢者の孤立化? ・ 関係づくり等のソフトな支援不足 (2.1.2)
③ 地域の資源	・ ニュータウンと自然の共存 (2.1.2) ・ 地価の安さと手ごろな住宅の購入可能性 (1.1.3)	・ “田舎っぽい” “未開発” 等の否定的なイメージ (2.1.2)

注：当該項目について記載している節の番号を () 内に示した。

②和泉市のこれから

以上をふまえると、和泉市は現在の若年有配偶率の高さを活かし、「家族で暮らせるまち」の形成を目指すべきである。その実現のために、①コミュニティ・デザインと②都市と自然との融合を結びつけ、地域コミュニティの核となる「場」を創出・支援することを提案したい。

地域コミュニティの核となる「場」とは、①若年層・高齢層を問わず年齢を超えた住民同士の交流や情報共有が促進され、地域コミュニティを活性化するようなアイデアと活動が生まれる場である。ひと昔前までの日本では、寺社やときには銭湯など、住民の集まる場が地域コミュニティに存在し、そのなかで近隣の困りごとやその解決方法が見出されてきた。住民自らが地域の課題発見・解決を行うためには、まずは多様な住民が寄り集まることが大前提である。公民館や集会所のような施設整備より、むしろ、人々が気軽に寄れる・面白そうだから行ってみたいと思うような仕掛けづくりが重要である。市内で活動する団体や住民との連携も欠かせない。

そうした「場」の創出にあたっては、②寺社の裏山や鎮守の森、耕作されていない畑・果樹園、信太や南部地域の山間部における貴重な自然を活用することが、開発の進んだ自治体には追従できない和泉市独自の魅力向上につながる。市内に点在する寺社はコンビニエンスストアよりも数が多く^(注3)、徒歩でアクセスできるため、身体的・経済的に行動範囲が制限される子どもと高齢者が日常的に気軽に立ち寄ることが可能である。檀家・氏子組織や地縁団体、NPO等との連携ができれば、そこに「お寺カフェ」「鎮守の森コンサート」等、若い世代の好奇心を刺激するようなイベントを定期的に仕掛け、世代を超えた交流を生み出すことができるだろう。また、農業や林業に関心をもつ都市住民は一定程度存在するため、耕作されていない畑・果樹園を「市民農園」「市民果樹園」に転用したり、山林やため池の手入れに参加してもらうことが考えられる。日常的に徒歩でアクセスできる寺社に対して、畑・果樹園、丘陵・山林はやや広域から休日に人々が集まる場と位置付けられる。自然と触れ合いながら多様な年代と交流する機会を数多く提供することは、子どもや新住民にとっては地域への関心と愛着を深めることにつながり、和泉市外に対しては「安心して子どもを育てられる地域」「潤いのある人生を送れる地域」というイメージの発信につながる。

都市部とのアクセス強化や商業・文化施設の整備のように更なる利便性の追求はある程度必要だろうが、利便性の向上だけでは類似する周辺自治体や利便性に優れた都市部に近い自治体との競争に打ち勝つことは困難である。また、都市的サービスや行政サービスによって新住民を惹きつける試みは、地元を愛する「住民」ではなくサービスを享受するだけの「お客様」「消費者」の増加をもたらしかねない。こうした「消費者」はサービスのうまみが消えた瞬間に転出してしまいうだろう^(注2)。和泉市の存続のためには、地元を愛し和泉市を盛り立ててくれる住民を大切にし、その定着を図っていくことが重要であり、本節で提案する「場」の創出・支援はその有効な手段となるだろう。

注

(1) 待機児童の定義は自治体ごとに異なり、数値上は待機児童数が少なくても実際には保育所利用を望む保護者が多い可能性はある。若年夫婦の定着を促すためには、自治体ラン

キングの順位に拘泥するのではなく、若年夫婦の保育所ニーズを広く把握する待機児童数の定義を行ったうえでその数を減らしていくことが重要であろう。

(2) たとえば、新婚夫婦やファミリー世帯に対する家賃補助制度を設けている自治体は全国にあるが、家賃補助の受給期間が終わった後に当該住民が転出してしまうことが悩みとなっている。

(3) 和泉市内の寺社・教会の数は138（大阪府『大阪府宗教法人名簿 平成26年3月31日現在』）、コンビニエンスストアは40（「iタウンページ」（<http://itp.ne.jp/>）による2015年4月20日時点での検索結果）である。

参考文献

中尾伊早子・広井良典、2005、「現代における「ちんじゅの森」の再生——新しいコミュニティの拠点として（第1回公共政策部門対話研究集会報告 NPO ちんじゅの森の中尾伊早子さんに聞く）」『公共研究』1(2)：317-339。

広井良典、2006、「ケアと「自然のスピリチュアリティ」——鎮守の森・お寺・福祉環境ネットワーク」『公共研究』3(2)：123-130。

付記

本節の提言にあたり、皿谷直三氏（有限会社コミュニティ）、渡邊弘範氏（石尾山弘法寺）、城洋子氏および三輪雅美氏（「いずみの国のいつくしみ市」実行委員会）に聞き取り調査を実施した。皆様のご協力に厚く御礼を申し上げます。

2. 「観光未来像」の提案

本調査では、和泉市の「観光未来像」を提案するにあたり、和泉市内の施設の「魅力」を探ってきた。特に、トリヴェール和泉の商業集積が持つ観光集客的な機能に着目し、エコールいずみ、ららぽーと和泉を中心に聞き取り調査を行い、ららぽーと和泉では自動車による来客者の出発地を調査するためナンバー調査を行った。

調査結果は、次の通りであった。ららぽーと和泉は、和泉ナンバー以外の大阪府内全域の車が約 23.9%であり、和歌山県など大阪府外からの車も約 20.2%であったように、広域から集客する施設となっていた（2014年12月調査）。さらに、コストコホールセールジャパン株式会社・和泉倉庫店が隣接し、エンターテインメント施設等を拡張できるスペースもあるように、持続的に広域からの集客が見込まれている。また、エコールいずみは、地域の生活者のための商業集積であって観光客を想定していないが、「和泉の国ジャズストーリー」、「和泉弥生ロマン・ツーデーウオーク」など、多彩なイベント会場として利用されている。これらは、商業集積が観光集客的な機能も果たしている証左である。

この結果から、今後期待できるのは次の通りである。地域ブランド調査（ブランド総合研究所）のアンケートにおいて項目「観光意欲度」の数値の向上が期待できるだろう。また、地域ブランド調査は、客にとって市への観光と市に対する魅力とは正の相関関係にある。和泉市への観光意欲が向上すれば、和泉市の魅力向上（項目「魅力度」の向上）も期待できるだろう。

ただし、本調査の中で、和泉市の観光資源に関する課題も明らかとなった。まず、日本人造真珠硝子細貨工業組合のガラスや人造真珠、弥生文化博物館体験学習メニュー、池上・曾根遺跡、久保惣記念美術館など市内には多数の観光資源がある。これらの資源をより活用していくことは望ましいが、今以上に活用するためには困難な課題を解決しなければならない。例えば、日本人造真珠硝子細貨工業組合は地場産品販売所 Rihanna(リアーナ)を組合事務局に併設している。しかし、ガラスや人造真珠に関する製造業者の組合であるため、小売やサービスに関わる部門が弱い弱であり、観光客向けの運営がなされているとは言い難い。また、久保惣記念美術館は、国宝や重文の美術品を鑑賞でき、庭園や休憩所も充実している。公共交通機関のバスによる移動は可能だが、ららぽーとやコストコから近いもののターゲットとする年齢層が異なるため周遊し難い。また、他の観光資源に周遊するとしても自家用車でなければ移動が困難である。このように、それぞれの観光資源には魅力があるものの、ホスピタリティ等を含む販売力、観光集客交通の利便性、体験などサービスの認知度の低さなど、克服すべきだが同時に解決困難な課題が多いといえる。

いっぽう、克服が比較的容易な課題もある。和泉市内一部の地域で開催するイベントを市全域に広げることや、市域や周辺市町村との周遊する仕組みをつくることである。市全域の活性化を考えれば、和泉府中駅周辺で開催されている「いずみ音楽祭」どのイベントは、和泉の国ジャズストーリーのように市全域に拡大することが望ましい。また、既に和泉スイーツが開発され、販売されているが、カフェや菓子店が充実している。これらのカフェや菓子店にも、飲み歩き食べ歩きのイベント「いずみ街バル」等への参加を促すなど、コラボレーションすることで新たな客層を掘り起こすことも可能である。

本調査では、調査前と後の 2 回に渡って学生ワークショップを実施し、「和泉市の強みと弱み」について議論してきた。これらの議論をまとめると、和泉市の強みは「商業施設」、「大学」、「まちの美観」があがっており、弱みは「遊ぶ場所(遊戯施設)」があがっていた。強みであるが弱みもある点として「生活の利便性」、弱みであるが強みもある点として「交通」、「観光」があがっていた。そこで、ワークショップの結果を反映させ、和泉市の強みである「商業施設」、「大学」、「まちの美観」を生かす観点から、和泉市の観光未来像の提案をしてみたい。

まず、商業施設は近年に一層充実し、観光集客的な機能を果たしていると結論づけた。また、商業集積による集客は増加傾向にある。ただし、一部の道路では自動車の増加による交通渋滞が起こっている。パークアンドライド等が実現すれば、渋滞緩和も可能かもしれない。しかし、商業集積自体も郊外に立地している上、無料送迎バスのサービスも終了している。今後、渋滞緩和に向けて高速道路周辺の道路状況と通過交通向けに迂回ルートの周知を利用者へ情報提供して対応することが次善の策であろう。

次に、大学は本学（桃山学院大学）を想定して述べていく。本学の学生達は、前述のイベントに参加しており、サークルや課外活動で多くの連携が行われている。また、訪問先への聞き取り調査でもバイト勤務する学生が多数いることも確認した。今後、学生が企画・提案できれば、これまで大学内で実施できなかったイベント（ミスキャンパスなど）も実施できる。また、大学のゼミやサービスラーニング等の正課科目で受け皿となる団体と連携し、団体の活動に参加してイベントを盛り上げることも可能だ。そして、学生が団体の活動に継続的に参加すれば、イベントの担い手となり、イベント等の行事の持続可能性も高まるだろう。

最後に、まちの美観は、トリヴェール和泉のニュータウンエリアを想定しているため、大阪府の景観計画区域や紀州街道、熊野街道などは対象としていない。トリヴェール和泉には市外からの新規の居住者も多い。モデルハウスを訪れる客の多くは生活の利便性を想像しつつも、なかば観光客のように（非日常的な視点で）まちの美観を捉えているのではないだろうか。そこで、まちの美観を数値化し、「見える化」して伝えることができれば、まちの魅力を口コミで広げることができる。また、トリヴェール和泉の美観は、新しさと偶然によって成り立っているかもしれない。長期的な視座に立てば、美観を一定に保つための条例や協定などの整備に向けた住民活動への行政による支援が必要である。

付記

本調査では、高間正浩様（㈱関西都市居住サービス）、松本和之様（三井不動産㈱）、北健二郎様（三井不動産商業マネジメント㈱）、井阪浩明様（日本人造真珠硝子細貨工業組合）にお世話になりました。ここに記してお礼を申し上げます。

3. 「郷土愛醸成」の提案

本章では、和泉山脈とその北麓の横山谷が形作る横山・南横山地域の歴史的成り立ちに注目し、山間部農村地帯が和泉市における生活環境を高める価値を有するという観点から若干の提言を行う。

和泉山脈は約 6000 万年前に大阪湾海底の砂礫が圧縮されてできた岩盤を有する。この和泉砂岩層が風化して出来た砂質土壌が、和泉山脈において豊かな山林を育ててきた。南横山の南端は、鍋谷峠や七越峠によって紀北地方と接している。峠道から延びる街道は、山間部の林産物を堺や泉大津といった都市部へ供給してきた。山脈北麓の街道沿いに発達した父鬼村は江戸時代には幕領に組み込まれ、支配上の重要な位置づけを与えられてきた。

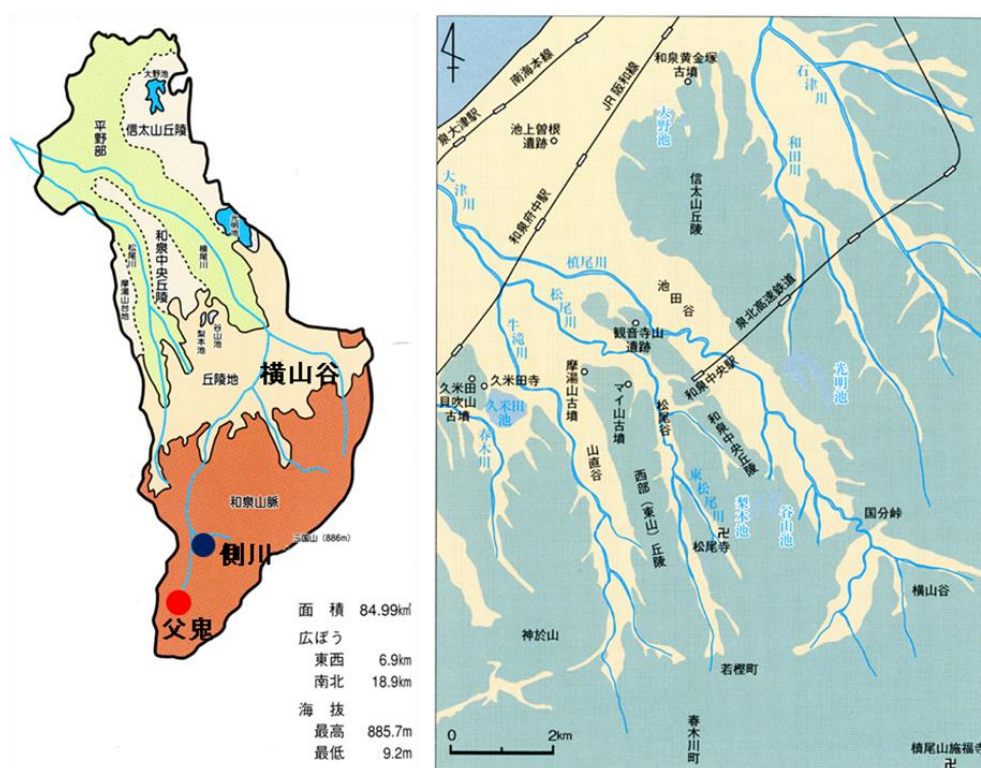


図1 大津川（横尾川・松尾川・牛滝川）流域の地形図 緑は標高50m以上。

図1 和泉市の地勢と地形（『和泉市50年のあゆみ』『横山と横尾山の歴史』より）

近世から近現代に至る時代、父鬼村の代表的産業は炭焼きであった。父鬼の松葉家に伝わる「山上毛売上覚」と題する帳面によって、江戸中期から明治期にかけて雑木林が炭山として売買されてきた様子を知ることができる。例えば、文政6年（1823）2月21日、松葉家から源太夫に「字ちちおり山」の雑木が代銀700目で売却されている（図）。また翌年8月29日には「字なべ谷山ノ出合山」の雑木が武右衛門と源助宛てに代銀180目で売却された（図）。ここにおいて、松葉家は山持ち（地主）であり、源太夫・武右衛門・源助は山を持たず、炭焼き労働に従事する人々であろう。そしてこうした「炭山」の売却とは、地盤ではなく、地上に生えている雑木を売却するという意味であった点に注意しておきたい。

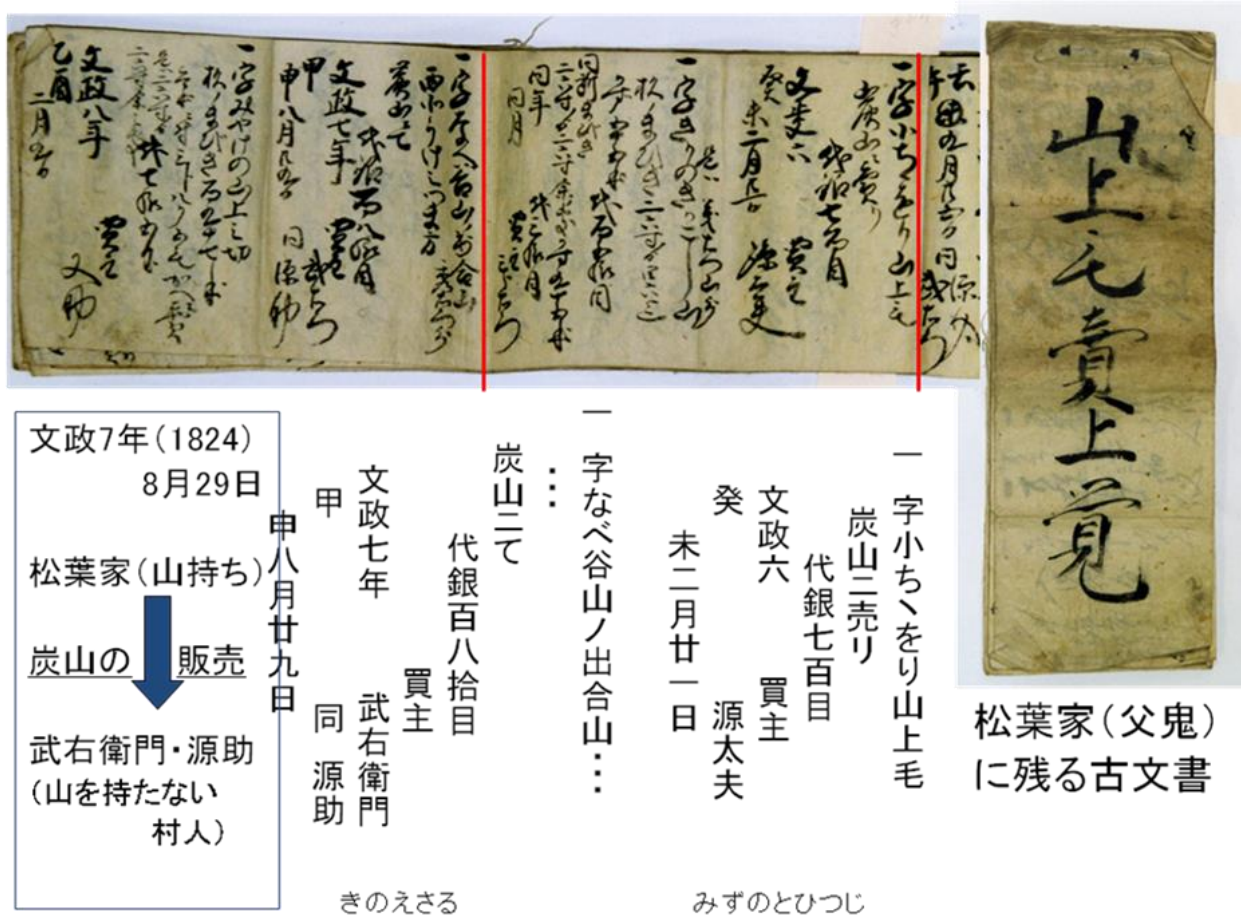


図 2 山上毛売上覚

父鬼村の炭焼きは、第二次大戦後に至るまで行われていた。現在、南横山小学校で児童の炭焼き体験を指導している山本博和氏（父鬼町、1932 年生まれ）は、この時代に炭焼きに従事した経験を持つ。山本氏によると、父鬼の炭焼きは次のような特色を持っていた。

- ①炭焼き労働は一人ではできない。親子・成長した兄弟・友達などが組んで二人または三人一組で従事する。夫婦で労働することもあるが、基本的には男性が従事する重労働であった。
- ②炭焼きに従事する季節は秋口から 3 月頃までの冬場である。
- ③山主から山（雑木）を買う。早朝から山を歩き、早朝から山中を歩いて、バベやウバメガシといった広葉樹を伐採する。
- ④山の中に礫岩を積んで窯を設け、炭を焼く。1 日に 6 俵（1 俵は 15kg）の生産量であった。
- ⑤生産された炭は横山地域で売却し、現金を手に入れて府中などで米に換えた。
- ⑥かつて炭焼きに必要な雑木を競争で伐採した。そのため適当な雑木を求めて河内の滝畑や和歌山県域まで歩くこともあった。炭焼きのために伐採した雑木はおよそ 20 年で自然更新される。
- ⑦戦時中から戦後にかけて物資が逼迫していた頃が、炭焼きの全盛期であった。父鬼ではおよそ 30 軒が炭焼きに従事していた。（全戸数の 1 割弱にあたる）

このような、自然を相手とする山間部農村に特有の生業が、近世から近現代に至る

まで脈々と受け継がれてきたのである。こうした近世以来の生業に加え、横山地域では近代に入り温州みかんの生産が本格化し、従来の山林を伐り拓いてみかん畑を開墾していく動きが広まった。みかん畑の開墾については、旧横山村役場文書に含まれる開墾許可申請書（900筆分以上）によって跡づけることが可能である。明治・大正期にみかん畑の開墾が盛んに行われたのは仏並・岡・坪井・九鬼・善正といった村々であった。これらの村々は、平坦な集落地の後背地が傾斜地となっており、開墾に適していたと思われる。

そして明治期には、杉や檜を植林して用材林を人工的に育成する林業がはじまった。用材林の育成は、植林にはじまり、下草刈りを7年間行い、続いて除伐（間伐）を10年サイクルで樹齢80年（またはそれ以上）に至るまで繰り返すという、長期にわたる施業を必要とする産業である。植林による林業は、都市化や産業革命が推し進められた明治期に盛んになったほか、空襲後の都市部で木造住宅の需要が高まった第二次世界大戦後にも活発に行われた。

このような開墾や林業のあり方を見ると、近代に入ってから人間が自然環境に手を加えて改変し、資本主義的な商品生産の営みに自然を適合させていくという、人間と自然環境の新しい関係が始まったと言える。このような関係は、近代から戦後高度成長期に至るまで続いた。

これに続く、高度成長から現代に至る時代には、林業が全体的に衰退していく。背景としては、エネルギー革命によって山林が人間にとっての燃料供給源としての意味を失ったことや、安価な外国産輸入材に押されて内地材の不利が顕在化し、林業が経営として成り立たなくなったことが大きい。内地材を使用する日本建築や公共事業が減少し、職業としての魅力を失った林業から若者が離れてしまった。施業の担い手を失った山林が放置されて



荒廃するに至っているのが現状である。泉州の山間部も例外ではなく、槇尾川上流域ではやせ細った杉や檜が密集し、鬱蒼とした薄暗い山林を形作っている風景をしばしば目にする（写真）。そして横山・南横山地域の村々は、人口の減少と高齢化に苦しんでいる。国勢調査によると、2000年から2010年にかけて和泉市域全体では人口が約7%増加したが、この間に山間部の村々は人口が1割から2割減少したのである。

和泉の山間部農村において、歴史を生きた人々は時代によって自然環境との関係を変化させながら、長期にわたって地域社会を再生産し、存続させてきた。こうした豊かな自然環境は、都市的生活を営む現代の市民にとっても健康で安全な生活を世代を超えて持続させていく上での、かけがえのない資源である。こうした歴史的な観点から現代の和泉市民にとって山間部農村が有する価値を明らかにし、その増進のための施策に向けて提言する。

第一に、山林の施業（手入れ）を行い、山林を保水力の高い健全な状態で維持していくことが大切である。山林が荒廃（育成の不良や枯死）することが、豪雨時や震災による土石流や地すべり等の発生につながることはよく知られている。また、和泉市を代表する河川である槇尾川・松尾川源流の環境が健全化することで河川の水質も保たれる。防災や水質保全是河川下流部に展開する人口密集地（都市部）の住民にとって益するところ大である。河川によって都市部と結ばれる山間部の環境保全是、人間生活を取り巻く環境の水準にとって重要な意味を持つ。

第二に、山林の施業を可能にするために、山林が生業を営む空間として機能しうる条件を形作ることである。例えば和泉の製材業者（13社）は「和泉木材」ブランドの用材を取り扱う業者の連合体として府の認可を得、地元木材を使用することに対する消費者の心情に訴えてこれを刺激しつつ、家具製作者や建設業者の間に流通販売網を創出することに務めている。また、学校という公共財を司る市教委は、例えば小学校のトイレ木質化を地元材を使って実現するという具合に、地元材の消費ルート確保に一役買っている。

第三に、山林の手入れが計画的に実施されることで、林業の多様な技術が世代を超えて継承されていくことに注目したい。自然更新にせよ植林にせよ、林業は人間が自然を相手として労働力を投下し、多様な道具の使いこなしを必要とする技術の宝庫である。また、気象や植生・生態系にかかわる自然知も、生業を通じて活用される機会がないと、いつか忘れ去られてしまう。山間部に生きた人々が長い歴史を通じて培ってきた技術や知識を次世代が継承していくこともまた、現代の市民が自らの暮らす郷土に対する認識を深める契機を形作るであろう。



2014年10月12日大野町での調査



2014年11月23日 父鬼町での調査

（付記）

本提言は、2014年度秋学期・桃山学院大学経済学部コース演習08クラス（島田ゼミ）での学習活動を基礎として作成された。学習にあたりテキストとしたのは和泉市史編さん委員会編『横山と槇尾山の歴史』（和泉市、2005年）である。また、和泉市の支援を得てフィールドワークと聞き取り調査（10/12大野町側川・北野政吉氏、11/23父鬼・山本博和氏、橋本吉兄氏ほか父鬼町内会の方々）、史料調査（11/12和泉市史編さん室）を実施した。学生に調査学習の機会を与えていただいた各位に御礼を申し上げます。

（以上）